

遠藤文学における女性(二)

―歴史小説の場合―

遠藤文学における女性を考える上で、歴史小説(伝記、時代小説も含む)を検討するのは大変意義深い。

歴史小説においては実在した人物が多く扱われるが、女性の場合はその詳細が伝わっていない例も多い。また、時代という制限も加わり、全く自由に女性を描くこともできない。

そうしたモデルのある場合も含め、遠藤はどのように女性を描いたのだろうか。以下、歴史小説における彼独特の女性観を探ってみたい。

一

遠藤の歴史小説における女性観を検討する上で足がかりとなる格好の題材がある。それは、「日本の聖女」(「新潮」昭55・2)である。

「日本の聖女」は、細川ガラシャ夫人が初めて教会を訪れたところから、関ヶ原の戦い前に最期を遂げるまでを、西洋人修道士の目を通して語るという設定になっている。ここで、今後の論の展開に必要と思われるので、細川ガラシャ夫人の生涯について、簡単に触れておきたい。

明智光秀の娘、本名玉、玉子。父親同士の縁もあり、織田信長の媒酌

笛 木 美 佳

で細川藤孝の息子、忠興に嫁す。光秀が本能寺の変を起こした折、細川家を味方と頼んだが、彼らは明智方に付かず、結局は秀吉と手を結んでいく。謀反人の娘となった玉は、二年以上にわたって丹後の味土野に幽閉される。その際、切支丹家庭出身の侍女(小侍従)から切支丹の話聞く。大坂に戻ってから、自分の幽閉中に忠興が側室を置いたことを知り、心に痛手を負い、また忠興を通して聞いた高山右近の切支丹の話に魅せられて、いっそう切支丹信仰に心傾けていく。忠興が外出を強く禁じたので、忠興が九州攻めで不在のうちに侍女を装って玉造の教会を訪れ、神父(修道士通訳)の話聞く。その後、侍女らをも信仰に導き、苦勞の末に自身も受洗し、ガラシャの洗礼名を授かる。秀吉の死後、武将たちは東軍(徳川家康方)と西軍(石田三成方)に分かれて争うが、三成は東軍方についた武将の妻を人質にとって、敵の士気を殺ぐ作戦に出、細川忠興夫人ガラシャを手始めに捕らえようとする。当時は、人質とならず、ひそかに脱出するか、自決するかのいずれかを選択するのが慣例であった。ガラシャは出陣前の夫の言いつけ通り邸を出ず、切支丹故に自ら命を絶つのではなく、家臣に長刀で胸を突かせて最期を遂げた。

以上がガラシャの生涯のあらましであるが、ガラシャに関する資料は多いとは言えない。細川家の子孫、細川護貞氏も「遠祖・ガラシャ」⁽¹⁾において、遺物から「器用な、忠実な方であったこと」と、書簡や最期に示した家族への配慮から「当時としても、高い婦徳の持ち主であったこと」はわかるが、「どこかで確実な良質な資料が偶然発見されない限り、これ以上にはわからないであろう」と記しているくらいである。つまり、現在までに発表されている伝記・小説・戯曲のガラシャ像には、執筆者の主観的推察による補足がなされているのである。

次に、ガラシャがいかに評されてきたか、確認しておきたい。昭和二、三十年代までのガラシャ評価は高かった。レオン・パジェス「總ての道徳の完全な鑑」⁽²⁾、『日本切支丹宗門史』、新村出「東西、新旧、保守進歩両派から婦女の鑑と讃美されること夫人の如きは、古今無比と思ふ」⁽³⁾、『吉利支丹研究餘録』、ヘルマン・ホイヴェルス「古来日本婦人がそなえている美德の完全な鑑」⁽⁴⁾、『全世界の女性の鑑』⁽⁵⁾（『細川ガラシア夫人』序）等、ほぼ手放しと言ってよい賞賛である。

芥川龍之介が「糸女覚之書」⁽⁵⁾で俗物的で感情の起伏の激しいガラシャとして皮肉な目で描き出したこと、森田草平が小説「細川ガラシャ夫人」⁽⁶⁾において忠興の視点から、普通の女のように泣いたり、縫ったりすることのない冷たい女としてとらえ、さらに「細川ガラシャの生涯」⁽⁷⁾において「関ヶ原の役前における彼女の死といえども、決して単なる愛情や貞操観から出たものではない。むしろ忠興に対する愛の復讐であつたろうとさえ思われる」と書いたことは例外である。

がその後、宮島真一は『貴理至端之精華 伽羅奢細川玉子夫人』⁽⁸⁾において、その最期を次のように書いている。

ガラシャ夫人は最期に臨んで、自ら死を選んで、少斎に胸を突くように命じているように伝えられている点からみると、自ら手を下しこそしないが、明らかに自決と見るべきではあるまいか。／教会側では、その教義に反しない点を強調せんとするのあまり、多少牽強附会のきらいがありはしないかと思われる。

この頃から、ひとりの「人間として」ガラシャをとらえる試みが進むのである。

例えば、永井路子は「朱なる十字架」⁽⁹⁾で信と不信がせめぎ合う戦国の世において、苦しみ迷いながらも「信」を生きる指針として貫いたガラシャの誇りを描き、その一方で、そうした生き方に疲労を覚えた彼女が、死をそこから逃れる手段として、神の「恩寵」として積極的に受け入れていったと書いた。また、三浦綾子は「細川ガラシャ夫人」⁽¹⁰⁾において、戦いにあけくれる男の世界に巻き込まれていく女の、立場の弱さを悲しみ、苦悩するお玉の姿を活写し、その中で高山右近から切支丹信仰の重みを教わって、信仰にも右近にも憧れていくさまを描いている。以上の二者の例に見られるように、女性の鑑というよりは、迷い、苦悩する、実に人間的なガラシャ像が描かれているのである。この傾向は平成の現在も続いている。

さて、こうした動きの中でも遠藤の「日本の聖女」は、独創的な視点からガラシャ観を述べた作品となっている。

まず、語り手である西洋人修道士（私）は、なぜ細川の奥方（ガラシャ）が仏教ではなく切支丹に心を傾けたのか、執拗に探る。小侍従（記録に伝わっているとは異なり、「年とった侍女」となっている）が「お寂しいからでございます」と答えると、「人間、誰もが寂しいものであり、何もあの女

性お一人ではない。寂しくて仏の道をきく日本人は多いのに、なぜ、仏僧のもとには行かず、わざわざ切支丹の教会に来られたか、「奥方の寂しさには露わに語れぬ何かがあるように私には思われた」と詮索の手を緩めない。小侍従を通して寄せられる切支丹教義に関する質問から、奥方が「今日まで肉親にも夫にも心の拠りどころを見出せなかったのではあるまいかと想像」するが、それでも「ヨーロッパでも日本でも戦にあげられる貴族の妻や娘は、細川の奥方と同じ運命を持っている筈」であり、日本では「おおむね、世をはかなしとみて仏にすがるのが普通である」とまだ疑う。その後、小侍従から味土野に幽閉された過去を聞き、「夫を信じられぬゆえ……切支丹の教会に拠りどころを探されて参られ」たのだと結論づけていく。

この修道士が行きついた推測、つまり本能寺の変後、実家を失い、かつ夫を信じられない不安から切支丹に傾倒していったのだというところえ方は、珍しいものではない。例えば、『愛と信仰に生きた細川ガラシャ展』⁽¹¹⁾は、側室がいると知った衝撃にも触れて、「この屈辱から一夫一婦しか許さぬキリスト教に対して、玉の目がひらけていく」と説明しているし、庄子貴子氏は「ガラシャ入信の謎」⁽¹²⁾において、「夫忠興の許に戻っても、一度離れた心は戻らず」、「むしろ、信じようとしても、忠興の行動を見るにつけ、不信任が高まっていき」、「諸々の事情が重なり合い、ガラシャは、キリスト教にのめり込んでいったのではないか」とする。ただし、ここで留意すべきは、これらの分析には表立っていないが、同情、共感のニュアンスが感じられることである。

ところが、「日本の聖女」の〈私〉は、奥方のその姿勢を徹底的に糾弾するのである。「日本人の多くは、世に生きぬくことの辛さに耐えかねる

と、逃げ場所を宗教に求める者が多い」が、「私のようなヨーロッパの人間から見れば、それは人生からの逃避であり、人生の苦しさを回避する弱い生き方」、仏教で「解脱とか遁世と呼ぶ」生き方なのであり、「決して切支丹の生き方ではない」とする。したがって、奥方が「世の現実に耐えかねて教会の門を叩くのは、いかにも日本人風だと思わざるをえな」と批判するのである。さらに〈私〉の批判の目は、奥方の尊敬する高山右近にも向けられる。右近は秀吉の切支丹禁教令を受けて、領地領民を捨てて信仰を貫いた英雄とされるが、〈私〉はその生き方に弱さを見るのである。右近とは対照的に、表向きは信仰を捨て、裏で右近を匿い、宣教師らの便宜をはかるという「面従腹背」の生活を送っている小西行長を引き合いに出して、「おのれの弱さのため現世を回避するだけが切支丹の道ではなく、小西殿のように現世のなかで卑怯者と見られながらも、術策をこらして主のために生きるのも切支丹の道ではないか」と考えるのである。そして、神父宛の奥方の手紙の「死はこの濁世からようやく離れ、天国に参ることなれば、わたくしにはむしろ悦ばしきこと願わしきことと前々から考えて参りました」の部分を引きいて、「高山殿と同じように奥方もまたその現世の十字架を担おうとするのではなく、むしろ放り出すことが宗教的だという気持が強く」、「そこに切支丹信仰の美名をかりた異端の臭いを嗅ぎとらざるをえ」ないとする。さらには、「悪魔」が「巧妙に人間の心のなかに、いや神を求める心のなかに滑りこむ」と見て、「奥方のお心には何か間違っているものがある」とするのである。

西洋人修道士〈私〉の奥方批判はそれだけではない。夫を愛せないという点にも向けられている。この、夫と心通わせ合えない点についても他に指摘がないわけではない。例えば森田草平は先に引用したように「細川ガ

ラシャの生涯」において、「関ヶ原の役前における彼女の死といえども」、「忠興に対する愛の復讐であつたろうとさえ思われる」としているし、吉田知子氏も「ドラマチックな細川ガラシャ」⁽¹³⁾において、「新興宗教に凝り固まってしまつて日夜こっそり拝み、金も身も心も捧げようとしていたガラシャの「心のどこにも夫などいなかった」ととらえ、逃げずに家臣の手によって遂げた最期についても、「夫からの許しがない限りこの屋敷から一步も出ない」と断つたことを取り上げて、「このあたりが『婦徳の鑑』とされるゆえんだが、実になんとも彼女らしいかわいげのない頑固さだった。夫へのあてつけ、というか、絶望とも考えられる」と手厳しく指摘している。そして、「数奇な生涯のためではな」く、「美しく、頭がよく、教養もあり、血筋もよく、それにもかかわらず、おそらく一度も愛し愛されたことのない女、という意味で」「悲劇の女性」として「第一にガラシャをあげたい」とまとめているのである。

しかし、この夫への愛の欠如に信仰の危機を読み取り、批判しているのは遠藤の「日本の聖女」だけである。語り手〈私〉は、「夫を愛しえない者にどうして神を愛しよう」と疑問を抱く。そして、洗礼の希望を伝言する小侍徒にも「洗礼を受けられるよりも、奥方はまず殿を御大切にされることが大事と思われます」と忠告するのだが、その後のパードレに宛てた奥方の手紙の中に一度も夫のことが触れられていないことから、「奥方の世界にはもう殿は存在」せず、「おそらく夫の苦しみや悲しみに一度も心をよせたこともなく、夫のために祈ることさえまったくなかったにちがいない」と厳しい視線を向ける。つまり〈私〉から見ると、先の現実逃避の傾向と併せ、「奥方は既に殿から心を離して、現世で生きることも棄てたいと考えて」おり、「その考え方を切支丹の教えだと錯覚している」の

である。奥方の信仰を切支丹の教義に外れていると考える〈私〉には、その最期も「自殺なされた」としかとらえられない。追悼ミサでの管区長の「あの方が自決なされたとは思いますまい」という説明にも「くるしい無理」を感じ、奥方に対する「日本の聖女のような気がいたします」という賞賛にも「奥方は切支丹として死んだのではなく、日本人の宗教で亡くなったのだ」という「冒瀆の声」を聞いてしまうのである。この真のキリスト者ではないというガラシャ観は他に類を見ないものといつてよい。このガラシャ観は西洋人修道士の視点から描かれたという特性によるのだろうか。

ここで細川ガラシャについて遠藤が書いた他の文章を参照してみたい。まず、「日本の聖女」と同年同月に発表された「細川ガラシャ」であるが、遠藤はここでも夫への愛を失ったガラシャについて、忠興の立場から次のように書いている。

忠興にとって彼女が冷たくなればなるほど怒りと疑惑とが燃えあがる。忠興もまた苦しんだのである。多くの細川ガラシャ伝にはガラシャを美化するあまり、この忠興の苦しみに冷淡である。(中略) 一方的に忠興だけを責めるわけにはいかない。

さらに、現世からの逃避についても、当時の日本人たちが「あまりに早く基督教に感化され共鳴してしま」った背景を探り、「当時の切支丹の大半は無常感からの脱出路として基督教を求めたのであり」、「細川玉もまた、その一人だった」と断言している。以上は、「日本の聖女」とほぼ共通した観点からの非難である。

が、この文章において、遠藤は別の観点も付け加えている。それは、

細川ガラシャの生涯を管見する時、私が感じるのは戦国時代に生れた女の哀れさである。(中略)教会側から言えばすばらしいこの聖女は俗界側からみると、あまりに薄幸な女でもあった。

にみられる〈哀れ〉である。この〈哀れ〉という見方は、十年以上も経過した平成四年から遠藤が連載した「戦国夜話」中の一編、「細川ガラシャの信仰」においても変わらない。ここでも彼女の夫への愛情の欠如、現実逃避の傾向を指摘したのち、次のようにまとめている。

私は気の強い女性が苦手なので、長い間、彼女を敬遠してきた節があります。／＼しかし、実際に調べてみて、私が彼女に感じたのは、強さよりもやはり、戦国時代に生きた女の哀れさです。もちろんこれは玉子に限らず、この時代に生きたすべての女性たちにいえるのですが。

この〈哀れ〉という指摘には注目を要する。というのは、ガラシャ伝、小説は数多くあるが、その中でガラシャを〈哀れ〉と評したものは他にはないからである。遠藤の言う〈哀れ〉とはいかなるものなのであろうか。

二

遠藤は戦国時代を扱った歴史小説、伝記を数多く書いています。そこで、次の作品を対象に「戦国時代に生きた女の哀れさ」を追ってみました。

- ・「ユリアとよぶ女」(初出、以下同じ「文藝春秋」昭43・2)
- ・「鉄の首枷——小西行長伝」(「歴史と人物」昭51・1、52・1)
- ・「銃と十字架——有馬神学校」(「中央公論」昭53・1、12)

・「王国への道——山田長政」(「太陽」昭54・7、56・2)

・「宿敵」(「宿敵」昭60・12、角川書店)

・「反逆」(「読売新聞」昭63・1・26、平元・2・27)

・「決戦の時」(「大阪新聞」平元・9・13、2・9・18、ほか諸紙にも連載)

・「王の挽歌」(「小説新潮」平2・2、4・2)

・「男の一生」(「日本経済新聞」平2・9・1、3・9・13)

・「女」(「朝日新聞」平6・1・1、10・30)

調査の結果、〈哀れ〉(「憐れ」も含む)という語は、自分の意志で運命を決められず、不幸に陥っていく状況に対して用いられていることが明らかにになったのだが、そこには特別な配慮がうかがえた。

まず、〈哀れ〉という語は、男の視点から女の人生をとらえたときに用いられており、別の女からの視点において用いられることは極めて稀であった。小説「女」において淀の方の妹おはつが、晩年の姉を思う場面で、「姉妹として幼女時代、少女時代、共に悲しい別離の運命を分かちあっていた。その意味では姉の運命をあわれに思う気持ちには当然あったろう」(傍線引用者、以下同じ)とあるが、これも語り手の補足である。

また、〈哀れ〉が男に用いられることも稀である。「王国への道——山田長政」に、自分が出世するためにその殺害に関与しなければならなかったシーシン親王に対して、「長政の心にも」「憐みが泉のように起」こる場面があるが、シーシン親王はまだ子どもでもある。「決戦の時」において信長の天下布武の犠牲となった万福丸(信長の妹お市の息子)にも「憐れ」が用いられているが、やはり子どもに対してである。「女」で登場する秀吉には二度〈哀れ〉が用いられるが、一度目は信長の鰻取りの桶持ちをして「尻はしより、泥まみれ」、「貧相」な体^{てい}に対しての「哀れ」であるし、二

度目は淀の方が、病床に伏した「瘦せこけた老人」である秀吉を「一人のあわれな老醜そのものの男」ととらえたものである。男については老幼に限られているといつてよい。

遠藤の用いる〈哀れ〉の特徴は、以上のような使用対象に限られない。先に、男によって女が〈哀れ〉と評されていることを指摘したが、男によって〈哀れ〉と評されたにもかかわらず、女である当人にはその意識がない上、同性である女からは羨望の眼差しを注がれる場合も見うけられる。ここから言えることは、遠藤が、男における幸・不幸と、女における幸・不幸の感覚のズレを書き分けているということである。「男の一生」における吉乃（信長の側室）を例に挙げたい。

吉乃は夫を亡くし、兄の構える生駒屋敷に戻っていたところ、信長の目にとまり、信忠・信雄・於徳の三子を生むが、病を得て早く亡くなる。作品の主人公である前野将右衛門は、生駒屋敷に出入りして吉乃に密かに思いを寄せる男である。彼は吉乃の死後も彼女をたびたび思い出すが、「戦国の女の憐れさ、哀しさに吉乃もお栄（引用者注 思いを寄せながらも将右衛門が自らの手で斬らなければならなかった女）も生きねばならなかったのだ」と〈哀れ〉を見ており、これは終始変わることがない。けれども、当の吉乃は亡くなる直前、生駒屋敷から信長の居城の近くに移される場面において、次のように語られている。

「ここからお城が……見えます」／須古は姉の吉乃の寝床を城の見える場所に移した。吉乃は一日中、愛する男の住む城を眺めくらしした。信長が戦の場で死ぬように運命づけられているならば、女の吉乃は愛の戦場で死んで本望だった。

彼女にとっては〈本望〉だったのであって、〈哀れ〉ではないのである。

さらに、将右衛門の甥の子孫、千代は、父孫四郎の語る一族の話を書きとめる際、「父親から吉乃の話をきかされるたびに、何ともいえず羨望を感じた。短い命だったが、さほどまで信長に愛されたその生涯は女冥利につきるものだったにちがいない」と思い、聖母への祈りの中の一節『女人において、わけて御果報いみじきなり』と呟きながら、「吉乃の生涯も果報いみじきであったような気がする」のである。

吉乃以外にも、遠藤がしばしば取り上げるお市（信長の妹、浅井長政に嫁ぐが信長に滅ぼされ、再婚した柴田勝家も秀吉に滅ぼされて夫と共に自決する）の例が挙げられる。彼女も、男たちからは〈哀れ〉と評される。

・「お栄も憐れ。吉乃さまも憐れ。ならばあの小谷の城の頂きにもう一人、哀しい女（引用者注 お市）が住んでおられるぞ」（男の一生 蜂須賀小六の言葉）
・将右衛門はお市のあまりに数奇で悲劇的な生涯を考え、その生涯が明日は閉じるのだと思うと、凄惨とも哀れとも言葉のあらわし方がなかった。（男の一生）

・「あわれなものよな、お市さまは」／秀吉も万感の思いに駆られたか将右衛門の傍らに立って呟いた。（男の一生）

けれども、お市自身に〈哀れ〉を嘆く場面はない。わずかに「反逆」において、夫勝家が敗戦を前に三人の娘を落とすことを決め、「思えば不憫な姫たちよ」「かかる世に生れあわせたるがゆえ……」と嘆いたのに対し、「いかなる世でも女の哀れさには変りはありません。あの娘たちは、女の辛さ、哀しさをとくに知っております」と答える場面にその意識がかいま見られるが、これとて自身に限定したものではない。

以上は、男と女で〈哀れ〉のとらえ方が異なった例であるが、その一方で、男女ともに、本人も含めて認識の共通する例も挙げられる。濃姫（信長の正室）である。

濃姫は体が弱く、正室でありながら信長の子どもを生むことができなかった。その上、信長が彼女の実家、齋藤家と争うことになり、慣例に従って実家に戻されることに決まった後、自決した女である。「決戦の時」においては、信長から「不憫な……」と呟かれ、自決後も「あわれな女よ」と思われている。別の作品「男の一生」でも、小六に「女は……夫に見捨てられれば終りじゃな」と言われ、将右衛門にも「子を生めぬ女は悲しいの」と呟かれている。さらに、「決戦の時」では語り手によっても「戦国の時代に嫡男を作ることができない正室はあわれである」と語られている。そして彼女自身も、信長の「同情」の言葉に、「辛う……ございます」と「涙をの」み（「決戦の時」）、また墓参りをするお市の想像の中に蜻蛉となって現れ、「そなたも戦国の女。戦国の女は不倖せでございます」、「武辺の男たちの世には巻きこまれぬようになされませ」（「同」）と、我が身の運命を嘆き、忠告する存在となっている。

さて、ここで、ある疑問が浮上してくる。それは、三人の女、吉乃・お市・濃姫は同じ戦国の女として生涯を送ったのに、なぜ〈哀れ〉において違いがあるのかということである。何が〈哀れ〉を左右するのであろうか。――実は、三人の女たちの違いを遠藤はきちんと書き分けている。それは、愛の有無である。吉乃・お市の生涯には愛があった。

「男の一生」において、男の将右衛門には、吉乃がなぜ死の病のさなかに家移りするのかわからない。けれどもそれを聞いた同性のお弥（秀吉の正妻）は「好きなお方のもとなら、女は這ってでも参ります」と「怒った

ように答え」る。愛の重さである。また、作品中、吉乃は「内気で恥ずかしがり屋だった」のに、「信長への愛情によって」「弁舌たくみにな」り、戦の起こるたびに信長を案じ、病身の我が身を恨んで「せめてわたくしを身代りにして信長さまの御無事をと、神仏に祈っております」というひたむきな愛に生きる女として描かれ、先にも引いたように「愛の戦場で死んで本望だった」とされる女である。後代の千代の羨望も「さほどこまで信長に愛されたその生涯は女冥利につきるものだったにちがいない」という、愛を価値基準においたものである。

お市も愛し、愛される女であった。兄（信長）と夫（浅井長政）が戦う折、「信心する仏に夫の無事をひたすら祈った。勝敗よりも夫の安泰こそ彼女にとっては何よりもの願いだった」と描かれる⁽¹⁵⁾（「女」）。また、再婚相手の勝家が秀吉に敗れ、城で共に自決するときにも、

わたくしがこの城に嫁ぎましたのは、殿が人の情愛を大事になさるお方ゆえにございます。わたくしが殿とこの城で亡びますのも夫婦の情愛を大事に致したいからでございます。（「反逆」）

と語る。

そうした二人に反して、先にも引いたように、濃姫は夫の愛を得られなかったという点が強調されているのである。

ここで、女にとっての愛を遠藤がいかに大切なものとして描いているか、もう一作品挙げて検証したい。「王の挽歌」において、大友宗麟の先妻矢乃は、「奈多八幡の娘という誇りがあったからどうしても切支丹を理解することができ」ず、切支丹に傾倒していく夫宗麟に皮肉な口をきき、彼を追いつめ、政治にも口を出したが、とうとう離縁されてしまう。「矢乃が

心の奥底では宗麟を愛していることは宗麟自身にもわかっていた」が、彼は安らぎを求めて矢乃の侍女だった露と再婚し、矢乃とは二度と顔を合わせなかった。遠藤は矢乃の「孤独」を次のように描いている。

宗麟から捨てられて老いていく。女にとって他の何ものよりも愛に裏切られるほど辛いものはなかった。夕暮になると彼女は一人で泣いた。

戦国の女の〈哀れ〉を決めるもの、それは愛の有無であり、それこそが遠藤の女性観の大部を占めるものなのである。

三

前節で、遠藤の女性観に愛の有無が大きく関わっていることを検証したわけだが、女の愛がある方向性を持って変化していくことも指摘しておきたい。その変化が顕著になるのは「王の挽歌」以降である。

この作品において、宗麟が露を求めたのは、「この女なら他の誰にも語らなかつた彼の心の奥、彼の犯した罪障を母のように許してくれるかもしれない」と考えたからである。また露は、宗麟を切支丹に導いたザビエル神父と同じ眼ざしを持った女として語られている。彼が神父を思い出すとき浮かぶその「哀しげな眼」は、「彼を責めるのではなく、むしろ宗麟の苦しみを共にわかち合おうとするような眼ざし」、「亡き母のそれと重なりあ」う眼ざしであったが、宗麟は再婚後の「露のなかにもそれを見出した」のである。ここで浮かび上がってくるのは、露に同伴者としての役割が担わされていることである。

この同伴者としての役割が最も強く付与されているのは、「男の一生」

における将右衛門の妻あゆである。将右衛門はひそかに吉乃やお栄に心を寄せ、あゆを悲しませた。しかし、あゆは常に彼を笑顔で包み込んだ。その存在の重要性に将右衛門が気づいたのは、あゆの死後であったが、あゆは「わが心の故郷」であり、その「生涯に、その心の憩いに、かけがえのない存在」であり、「まるで永久の同伴者のように彼のそばにいた」と語られるのである。それだけではない。右近に誘われて、切支丹の話をセスペデス神父に聞かされた将右衛門は、あゆが「目だたぬ、平凡な毎日のなかで、ひそかに彼に働きかけ」、「戦に疲れた彼をいやし、休ませ、安心感を与えてい」る存在であったと、「まるで右近という神が人間にたいして、そうであるよう」な存在であったと思に至る。そして、「切支丹の神とは」「働き」であると聞き、「子どもにとり妻あゆが……その働きでござりました」と語った。それに対し、セスペデス神父は「前野さまは既に我らと同じ心にございますゆえ」「急いで切支丹の話など聞かれずともよい」と呟く。ここには、愛されるだけでなく、愛を与える女、さらにその愛に無償の愛、同伴者としての愛が加わった女——遠藤における母なる神のイメージが描かれている。そして、これが歴史小説における遠藤にとっての理想の女性像なのだろう。⁽¹⁶⁾

だいぶ遠回りをしてきたが、ここで再び細川ガラシャに眼を転じたい。「日本の聖女」の後、遠藤はガラシャを主人公にした小説を書いていない。平成に入ってから著述「細川ガラシャの信仰」で「私は気の強い女性が悪手なので、長い間、彼女を敬遠してきた節がある」と明かしたとおり、これまで取り上げてきた小説の中にもほとんど登場していない。登場しても、セスペデス神父の紹介のため（「鉄の首枷——小西行長伝」）、荒木村次に嫁いだ姉さとの回想の中で（「反逆」）、将右衛門の息子、景定に嫁いだ

於蝶の母親として（「男の一生」）といった、端役にも満たない扱いである。その中で唯一重要な役を振り当てられたのが「宿敵」で、これには主人公の一人小西行長の思い人として登場する。行長はたま（ガラシャ）の侍女であった糸と結婚し、糸を通してたまの消息を手に入れるのだが、それは、

たまは心の底から右近を尊敬しているようだった。／糸はたまがあの山崎の合戦の頃から夫への愛情を失っていることを身近かにあってよく知っていた。／そのたまの空虚な心を埋めているのが、ひよっとすると高山右近ではないのか、と彼女は何となく感じていた。

という姿である。後の場面で「細川ガラシャ夫人には夫への愛はこれほどもないことを、前々から糸に聞かされて知っていた」とも語られる夫人は、その最期についても、「この濁った現世を捨てたい気持ちから出た自殺にひとしかった」と、切支丹の教義から外れているとして厳しい評価を受けている。つまり、「宿敵」においても、「日本の聖女」で非難されていたのと変わらず、夫を愛することのできない女、辛い現世を捨てる女として描かれているのである。「宿敵」には、まだ「王の挽歌」以降に見られるほど、女性に多くを託されてはいない。しかし、行長にとって、その妻「糸だけが自分の心をゆるすただ一人の戦友のような気がした」とされている。同伴者的存在としての女性像の萌芽であろう。けれども一方で、ガラシャは相変わらず愛のない女だったのである。キリスト教の教義に背く、夫婦愛の欠如という観点からだけではなく、その後の遠藤が求めていった女性像と照らしても、細川ガラシャは〈哀れ〉だったのである。

さらに付け加えるならば、二月に「日本の聖女」を発表した昭和五十五年は、十一月から「女の一生」を連載し始めた年である。幕末から明治に

かけてと、時代はズレるものの、無償の愛を捧げたキクの献身を遠藤は描いている。「日本の聖女」はその後の歴史小説における遠藤の女性観を方向付けるのに一役買ったと言えるのかもしれない。

注

- (1) 「歴史研究」(315号、昭62・7)。
- (2) 上巻(昭13・3・10、岩波文庫)。
- (3) 『新村出全集』7(昭48・6・15、筑摩書房、初版は昭23、国立書院)。
- (4) 『細川ガラシア夫人』(昭41・3・20、春秋社、初版は昭14・9、カトリック中央書院)に所収。
- (5) 「中央公論」(大13・1)。
- (6) 『森田草平選集』1(昭31・7・10、理論社、初出は「日本評論」昭24・1、連載、のち昭25・2、山川書店より刊行)。
- (7) 『森田草平選集』1(昭31・7・10、理論社)に所収。
- (8) 昭40・10・30、中央出版社。
- (9) 昭46・5、文藝春秋。
- (10) 『細川ガラシャ夫人』(昭50・8・1、主婦の友社、初出は「主婦の友」昭48・1・50・5連載)。
- (11) 昭57春、毎日新聞社。
- (12) 「歴史研究」(315号、昭62・7)。
- (13) 『徳川千姫哀感』(平10・5・15、読売新聞社)。
- (14) 作品中、前野小右衛門は途中から将右衛門に名を改める。ここでは将右衛門に統一する。
- (15) この前に、お市は安定した生活を望むことが語られているので、その文脈からは愛よりも自身の生活を守るための祈りと受け取れなくもない。しか

し、後に「彼女はまだ若かったが、最愛の夫を失った日から、人生が余生となった」とされているので、私はここに愛を見る。

- (16) 「女」には同伴者の役割を担う女は登場していないが、最後に登場するお光は、名譽であり、本人並びに家族の出世が約束された將軍のお声掛かりを蹴って、「夫婦の契り」をした八百屋の男に嫁ぐ。その姿を見て、大奥で権力争いをしていたお加代は「女としての幸せはお光にあったのか、自分だったか、いまだに迷っ」ている。愛すること、愛を貫くことの大切さを示していると言ってよい。

テキスト（引用順 なお、引用にあたりルビは省略した。）

- ・「日本の聖女」『遠藤周作文学全集』8、平11・12・10、新潮社
- ・「細川ガラシャ」『図説人物日本の女性史』5、昭55・2・10、小学館
- ・「細川ガラシャの信仰」『このころの風景 戦国夜話』平8・6・10、小学館に所収、初出は「戦国夜話」と題して『THE GOLD』平4・4・5・3連載のうちの1話
- ・「女」『遠藤周作歴史小説集』7、平7・5・20、講談社
- ・「王国への道——山田長政」『昭56・4・14、平凡社』
- ・「決戦の時」上下（平3・5・20、講談社）
- ・「男の一生」上下（平3・10・15、日本経済新聞社）
- ・「反逆」上下（平元・7・17、講談社）
- ・「王の挽歌」上下（平4・5・15、新潮社）
- ・「宿敵」上下（昭60・12・20、角川書店）

細川ガラシャ関係で参考とした文献

- ・「ブリタニカ国際大百科事典」5（昭49・7・1、ティビーエス・ブリタニカ）
- ・「普及新版日本歴史大辞典」8（昭60・9・30、河出書房新社）
- ・「キリスト教人名辞典」（昭61・2・15、日本基督教団出版局）

- ・『世界大百科事典』26（昭63・4・28、平凡社）
- ・『日本大百科全書』21（昭63・5・1、小学館）
- ・『国史大辞典』12（平3・6・30、吉川弘文館）
- ・『日本史大事典』6（平6・2・18、平凡社）
- ・『岩波キリスト教辞典』（平14・6・10、岩波書店）

- ・「十六・七世紀イエズス会日本報告集」第1期3（昭63・2、同朋舎出版）
- ・レオン・パジェス『日本切支丹宗門史』上（昭13・3・10、岩波文庫）
- ・『綿考輯録』2（昭63・9、出水神社）

細川護貞『魚雁集 細川家に残っている手紙』（平2・12・15、思文閣出版）

芥川龍之介「糸女覚え書」（中央公論）大13・1

- ・新村出『吉利支丹研究餘録』（『新村出全集』7、昭48・6・15、筑摩書房、初版は昭23、国立書院）

・ミカエル・シュタイシェン『切支丹大名記』（昭5・11・5、大岡山書店）

・満江巖「細川ガラシャ夫人」（昭24・7・30、清水書房、初版は昭12・1、刀江書院）

・ヘルマン・ホイヴェルス『細川ガラシア夫人』（昭41・3・20、春秋社、初版は昭14・9、カトリック中央書院）

・ヨハネス・ラウレス『高山右近の生涯——日本初期基督教史——』（昭23・3・5、エンデルレ書店）

・森田草平「細川ガラシャ夫人」（『森田草平選集』1、昭31・7・10、理論社、初出は「日本評論」昭24・1・連載、のち昭25・2、山川書店より刊行）

・森田草平「細川ガラシャの生涯」（『森田草平選集』1、昭31・7・10、理論社）

・ヨハネス・ラウレス「細川家のキリシタン」（『キリシタン研究』4、昭32・1・15、洋々社）

・宮島真一『貴理至端之精華 伽羅奢細川玉子夫人』（昭40・10・30、中央出版社）

・司馬遼太郎「胡桃に酒」(『司馬遼太郎・傑作短篇選 戦国の女たち』平18・3・17、PHP文庫、初出は「小説新潮」昭43・10)

・永井路子『朱なる十字架』(平16・7・10、文春文庫新装版、初版は昭46・5、文藝春秋)

・伊藤大輔「細川ガラシャ」(『日本史探訪』6、昭47・10・30、角川書店)

・三浦綾子『細川ガラシャ夫人』(昭50・8・1、主婦の友社、初出は「主婦の友」昭48・1・50・5連載)

・田中澄江『歴史のなかの愛 万葉・戦国の女たち』(昭56・4・15、文藝春秋)

・『愛と信仰に生きた細川ガラシャ展』(昭57春、毎日新聞社)

・「歴史研究」特集 細川ガラシャの謎(315号、昭62・7)

・永井路子・司馬遼太郎「細川ガラシャ夫人」(『歴史のヒロインたち』平2・9・10、文藝春秋)

・百瀬明治『戦国武将の妻たち』(平5・11・26、PHP研究所)

・小石房子『女たちの本能寺』(平4・11・5、三交社)

・田郷利雄『日本史に光る女性22話』その虚像と実像と(平5・1・20、近代文藝社)

・吉田知子『徳川千姫哀感』(平10・5・15、読売新聞社、初出は「歴史と旅」平6・5)

・上総英郎編『細川ガラシャのすべて』(平6・6・10、新人物往来社)

・『その時歴史が動いた』13(平14・5・9、KTC中央出版)

・田端泰子『戦国の女たちを歩く』(平16・7、山と溪谷社)

・童門冬二『時代を変えた女たち』(平16・7・5、潮出版社)

・北川央「明智光秀の娘——細川ガラシャ」(小和田哲男編『戦国の女性たち——人の波乱の人生』平17・9・30、河出書房新社)

・辻ミチ子「信仰に殉じた美女——細川ガラシャ」(『日本史探訪の会編』おんなたちの戦国史 武将を支えた21人』平18・6・20、ぶんか社文庫)

・「芸術新潮」特集 細川家 美と戦いの700年(58・10号 平19・10)

(ふえき みか 日本語日本文学科)